京都帝國大學法科大學

經濟論叢

第五卷　第二號

大正六年八月一日發行

論說

營業稅ヲ賦課スキ營業ノ範圍……法學博士　神戸正雄
純粹資本（資金）ト資本財……法學博士　河上肇
中壽ノ說（三、完）……法學博士　財部靜治
現代的保險ノ成立（二）……法學士　小島昌太郎

時事問題

製鐵業ノ奬勵……法學博士　戸田海市
支那ノ裁厘加稅問題……法學士　木村增太郎

雜錄

歐洲戰亂ノ南米ニ及ボセル影響……山本美越乃
ゆご・すらう民族運動（二）……米田庄太郎
福島山形二縣ノ製絲業……法學士　河田嗣郎
臺灣人口動態統計十年報ヲ讀ム……文學博士　內田銀藏
戰時利得稅ノ諸例……法學博士　神戸正雄
學界ノ巨人しゅもらー逝ク……法學博士　神戸正雄

臺灣人口動態統計十年報ヲ讀ム

內田銀藏

臺灣ニ於ケル統計的調査ハ夙ニ頗ル整備シ、內地ニ於テ未ダ試ミラレザルモノモ臺灣ニ於テハ早ク實行セラレ、其ノ統計的出版物亦學術上大ニ參考ニ資スベキモノアルコトハ、人ノ能ク知ル所ナリ。高野法學博士ガ大正五年十二月發行ノ『國家學會雜誌』第三十卷第十二號ニ掲載セラレタル「本邦統計書雜觀」ノ中ニ於テ、「我殖民地中統計事業の最も整備しておるのは臺灣である、否臺灣は之を我內地の統計に比べても却て或點に於て勝つておるのである」ト云ヒ、臺灣總督官房統計課ヨリ年々刊行セラルル出版物ヲ擧ゲタル後、「以上の外に同統計課よりして明治四十年五月より同四十三年一月に亘り出版されたる明治三十八年臨時臺灣戶口調査の出版物（漢譯及英譯の調査記述の分をも合せ總て九冊）は有名なる良刊行書である、吾人は多大の期待を以て昨大正四年に行はれたる第二回戶口調査の出版物の完成を望むのであるが、此の期待の斷じて空にならぬことは確信して疑はざる所である」ト述ベラレタルハ、如何ニモ同感ノ至リナリトス。

明治三十八年十月一日施行セラレタル臨時臺灣戶口調査ノ性質、及其ノ結果ノ概要ハ、『臨時臺灣戶口調査記述報文、』又ハ高野博士ノ論文「臨時戶口調査ニ現ハレタル臺灣」ニヨリテ之ヲ知ルコトヲ得ベシ、後者ハモト明治四十一年十月及十一月ノ『國家學會雜誌』ニ掲載セラレ、尋デ大正四年五月發行ノ高

野氏ノ論文集『統計學研究』三〇六頁以下ニ收メラレタリ。

臺灣總督官房統計課ハ、本年(大正六年)六月ヲ以テ『自明治三十九年至大正四年臺灣人口動態統計十年報』ヲ刊行セラレタリ。其ノ緒言ニ據ルニ臺灣人口動態統計ノ調査ハ明治三十八年十月一日第一次臨時戸口調査ノ施行ヲ期トシテ之ヲ開始シ、明治四十三年ニ至リ五年ニ及ベルヲ以テ、此ノ五年間ニ於ケル動態ノ異動ト其ノ定型トヲ通覽センガ爲メニ曩ニ該五年報ヲ刊行セシガ、大正四年ニ至リ正ニ十年ニ達セルヲ以テ、前五年報ト同ジク後五年報ヲ兼ヌルニ十年間ノ實數ト比例トヲ對照シ、之ヲ十年報トシテ刊行シタルナリト云フ。今之ヲ閲スルニ報文ノ主要部ハ九十八種ノ統計表ヨリ成リ、(一)總覽、(二)出生、(三)死亡、(四)結婚、(五)離婚、(六)轉住ノ六部門ニ分タル、死亡ハ更ニ(甲)一般ノ死亡、(乙)小兒ノ死亡、(丙)死因ノ三者ニ區別シ、又結婚ハ更ニ(甲)一般ノ結婚、(乙)初婚ニ別チテ排次セリ。別ニ附錄トシテ參考用ノ統計表六種ヲ載ス。總紙數約八百頁、統計表ノ中、體性・年齡級及死因別死亡表(第四十五表)ノ如キ、一表ニシテ百三十餘頁ニ亘レルモノアリ、(三六四—四九五頁)、頗ル精細ヲ極ム。又幾多ノ表ノ場合ニ於テ實數ト共ニ百分比例ヲ一々算出揭記セルガ如キ、統計作製者ノ勞想フベシ。予ハ今統計ヲ專門トスル者ニ非ズ。此ノ報文載スル所ノ表ヲ一々仔細ニ吟味シテ之ヲ批判シ、又其ノ意義ヲ發揮スルガ如キハ、固ヨリ予ノ能クシ得ル所ニ非ズ。然レトモ此ノ報文ガ臺灣ニ關スル統計的研究ノ重要ナル材料トシテ、臨時戸口調査ニ關スル諸報文ト共ニ、永ク學者ノ參考ニ供セラルベキハ、予ノ信ジテ疑ハザル所ナリ。

本文ニ「報文」ト云フ語ヲ用ヒタルガ、此ノ十年報ハ記述報文ニハ非ズシテ、統計表集ノ報文ニ屬ス。讀者中萬一ノ誤解アランコトヲ恐レ、念ノ爲メ一言シ置クモノナリ。

昨年(大正五年)ノ春、予臺北ニ赴キ、臺灣我ガ版圖ニ歸シタルヨリ二十年ヲ機トシテ開カレ

タル勸業共進會ヲ觀タル折、注意ヲ惹キタルコトノ一ハ、該共進會ニ出陳セラレタル統計圖表ニ據ルニ、臺灣ニ於ケル痲刺利亞患者ノ死亡數ハ逐年減少シツツアリシニ、大正四年ニ至リ、急ニマタ增加シタルコトナリキ。此ノ事猶ホ念頭ニ存セシヲ以テ『臺灣人口動態統計十年報』ヲ接手スルヤ、先ヅ第四十四表、卽チ種族・體性及死因別死亡表ヲ檢セシニ、矢張リ次ギノ如キ數ノ揭記セラレ居ルヲ見出ダセリ。簡單ノ爲メ男女ヲ合算セル數ヲ採レリ、卽チ三四二―三四三頁及三四五頁揭記ノモノニ據ル、又外國人ハ暫ク之ヲ省ケリ。

	本島人	內地人
明治三九年	一〇、三六二	一、九五
同 四〇年	一一、四四一	二四四
同 四一年	一一、三一九	一八二
同 四二年	一〇、一一五	一九七
同 四三年	八、七〇一	一八〇
同 四四年	七、七三三	一七八
大正 元年	六、六八一	一九三
同 二年	六、三七九	一七八
同 三年	八、四〇	二一六
同 四年	一三、〇四五	二六五

右ニ據レバ、痲刺利亞患者　死亡數ハ、本島人ニアリテモ、マタ內地人ニアリテモ明治三十九年以來概シテ減少ノ趨勢ナリシニ、大正三年ハ二年ヨリモ多ク、四年ハマタ俄然著シク增加シ、本島人ニ在リテハ、十年間ノ最多數ニ達シ、內地人ニ在リテモマタ明治三十九年ニ次ギテノ多數ニ達シタルナリ。是レハ何故ナルカ、予ハ臺灣ノ事情ヲ詳ニセザルモノナレドモ、思フニ臺灣ニ於ケル衞生上ノ設備ハ、逐年改善ニ向ヒ、大正三年及四年ニ於テモ、ソレヨリ以前ニ比シ、寧ロ一層進步シ居リタルコトニテ、ソレ以前ニ比シ退步セルガ如キコトハ萬々コレナカルベキ也。然ルニモ拘ハラズ、右ノ如ク痲刺利亞ニ因由セル死亡數ガ却テ增加シタルハ、主トシテ衞生上ノ設備以外ノ原因、卽チ其ノ年ノ氣候等ノ關係ニ由ルモノナラント推測セラル。

痲刺利亞以外ノ疾患ニ因由セル死亡モ大正四年ハ割合ニ多カリキ。故ニ大正四年ニ於ケル死亡率ハ、本島人ニ在リテモ、マタ內地人ニ在リテモ、前數年ニ比シ、遙カニ高シ。種族及體性別死亡表(第二十八表)ニ據ルニ明治三十九年ヨ

リ大正四年ニ至ル十年間ニ於テ、年々人口千ニ對スル死亡ノ割合左ノ如シ。

	本島人（人口千ニ付死亡ノ割合、男女ヲ平均ス）	內地人（同　上）
明治三九年	三四・四	二〇・二
同　四〇年	三三・五	一八・四
同　四一年	三三・二	一五・四
同　四二年	三二・三	一六・八
同　四三年	二八・五	一四・九
同　四四年	二七・一	一五・四
大正元年	二五・八	一五・八
同　二年	二五・八	一五・三
同　三年	二八・七	一五・〇
同　四年	二二・九	一七・三

內地人ノ死亡割合ハ本島人ノ場合ヨリモ遙カニ低シ、又大正三年ニハ本島人ノ死亡割合前年ニ比シ頗ル高クナレルモ、內地人ニ在リテハ然ラズシテ、十年間明治四十三年ニ次ギテノ最低率ヲ示セルヲ見ル、然ルニ大正四年ニ至リテハ死亡割合ハ本島人內地人共ニ著シク增進シタルナリ。

人口ノ年齡構成及其ノ變遷ガ死亡率ノ研究上注意ヲ要スル一事項タルコトハ、予輩モ亦之ヲ認ム。之ニ就キテハ、大正六年六月發行、本誌第四卷第六號掲載ノ財部法學博士ノ論文「中壽ノ說」（七八九頁參看）

依テ念ノ爲メ更ニ種族及年齡級別死亡表（第三十二表）ニ就キ檢スルニ、內地人ノ場合ニ於テハ年齡級ニヨリ大正四年ノ死亡率、却テ三年ヨリ低キモアリ、然レドモ本島人ノ場合ニ在リテハ各年齡級、何レモ大正四年ハ三年ニ比シ死亡率高キコトトナリ居レリ。（一四四―一四五頁參看、此ノ第三十二表ノ性質、其ノ作製ノ方法、及此ノ表ニ現ハレタル數字ノ解釋ニ就キテハ、種々論究テ要スルモノアル樣ナレトモ、今之ヲ試ル暇ナキヲ以テ略ス。）

蓋シ死亡率ノ高低ハ種々ノ複雜ナル原因ノ合果ニシテ、輕々ニ速斷スルトキハ、正鵠ヲ失スルコトアルベシ。管見ニ據レバ、國又ハ地方ニヨル人口年齡構成ノ異同、及同一ノ國又ハ地方ニ於ケル人口年齡構成ノ時ヲ逐ウテノ變遷、幷ニ國又ハ地方及種族ノ異ルニ從ヒテ其ノ氣候風土體質、一般社會狀態、文明ノ程度、特ニ衞生上ノ設備、醫療ノ進步ノ度合ヒノ相同ジカラザル等ヨリシテ生ズベキ相違ノ存スルハ勿論ニシテ、而シテ假リニ此等ノ因由ヲ除外シ、暫ク同一ノ國又ハ地方ニ於ケル同一ノ種族ノ居据リノ人口若シクハ不變ノ人口（財部博士ノ所謂停滯人

口）ノ場合ニ就キ考フルモ、年々ノ死亡率ハ社會狀態ノ變化、文明ノ進歩、特ニ衞生上ノ設備、醫療ノ方法ノ改善等ニヨリ影響セラルルト共ニ、マタ次ノ二種ノ原因ニヨリ或ル程度マデ左右セラルルモノナルベシ。

一　或ル特別ナル年、又ハ或ル年間ニ生レタル子供ハ或ル他ノ特別ナル年、又ハ年間ニ生レタル子供ト本來全ク同一ナル强健ノ素質ヲ有スト云フベカラズ、而シテ此等ノ子供ガ生長期ニ於ケル養育及教育ノ如何ハマタ後年ニ於ケル疾病抵抗性ノ强弱ノ上ニ少カラザル影響アルベシ。故ニ或ル年ノ死亡率ノ上ニハ、此等過去ニ於ケル事情モ亦或ル影響ヲ生ズルコトアルモノト考ヘザルベカラズ。

二　同一ノ國又ハ地方ニ於テモ氣候ハ年々全然同一ナラズ、或ハ氣候ノ週期的變化モコレアルベシ。其ノ變化ハ人ノ健康ノ上ニ影響シ、或ル場合ニ於テハ衞生上ノ設備、醫療ノ方法ノ改善等アルニモ關セズ、死亡率ヲ高ムルコトモアラン。

思フニ此等ノ點ニ就キテハ定メテ統計專門家ノ間ニハ疾クニ精細ナル論究アリシコトナルベシ。予輩ハ其ノ詳說ヲ聽カンコトヲ欲スルモノナリ。（大正六・七・一六記）